

1人ひとりのもつ可能性を活かす仕組みを考えるアート展

Action!

vol.01

入場無料

2016年
1月15日[金]
→17日[日]

10:00—19:00 ※最終日は16:00まで



大分県立美術館 1階 展示室 A
〒870-0036 大分県 大分市 寿町2-1

主催：大分県 企画：NPO 法人 BEPPU PROJECT 協力：一般財団法人 たんぼぼの家、BRITISH COUNCIL

陶器・ガラス工房 ラ パロマ

中野伸哉 | なかのしんや

大分県国東市

「マーク周作さんの誕生」

中野：私はこれまで35年ほど雑誌や企業の広告などを担当するイラストレーターを仕事としてきました。結婚したのは30歳の頃。同じくイラストレーターをしていた妻と海外生活を体験したいと思って、現地新聞社のイラストレーターの職を得てオーストラリアに移住しました。2、3ヶ月経った頃に妻の妊娠がわかり、1991年にシドニーで周作が産まれました。

山出：周作さんの障がい気づいたのはいつ頃ですか？



中野：当時、住んでいたシドニー郊外の住宅地には障がい者を送迎するバス停があり、通所する子ども達をなぜか自分達には関係のない世界のこととして見ていた記憶があります。むしろ妊娠中の妻に対して障がいの話はあえて避けていたのかもしれない。湾岸戦争・日本のバブル崩壊など、世界情勢の変化もあり一時帰国しましたが、周作は同年代の子が喋り始める年頃になっても話さない。3歳になっても言葉が出ないので病院に行ってみると、障がいがあるとわかったんです。障がいの児を持つどの親もそうだと思いますが「なぜ、うちの子が？」と悩み、そこから現実を受け

入れなければならぬ親としての試練が始まります。自分達を責めたり無力を感じたり、現実を受け入れることは本当に大変な作業でした。

山出：受け入れるというのは、徐々にできていくことなのでしょうか？

中野：日々の生活の中で、それが彼のオリジナリティであることを親が学習し、受け入れて認めていくんです。有名な先生に診ていただいて、専門的な症状の名前を聞かされても息子の幸せには繋がらないと考えた結果、彼が幸せに暮らせる環境を作ること大切にしようとして夫婦で話し合いました。

「粘土に触れる環境を」

中野：相変わらず言葉は出ない周作でしたが、何かに固執する性格が表れました。その一つに粘土遊びがありました。粘土遊びを通すとコミュニケーションが取りやすく、仕事場で紙粘土を与えておくと非常に面白いものを作るのが微かな希望でした。

山出：中野さんから何かを教えることはあったのですか？

中野：干渉しない努力はしました。こうしたらもつといいのにも思うことも多くありますが、僕のコピーを作るわけではないので。



近くの作業所などに夫婦で見学に行き、周作の将来を想像してみましたが、彼の才能を活かせる環境が見つけれず、陶芸工房を作るために移住を決意しました。

山出：どうして国東市だったのですか？

中野：空港が近いし、住むなら「都会」の対極である「田舎」がいいと思ったからです。振り幅が大きければその間に多様な可能性があるので、とも考えました。全国的にあまり知られてない国東ですけど、歴史や文化など独

特の価値観があり、私にとって「理想的な田舎」だと思いました。

「仕事をするといい自覚」

中野：親としては、周作が陶芸の仕事を辞めたければいつでも辞めていいというスタンスで、強要はしていません。しかし仕事としてやるのならば当然クオリティは求められます。言葉での説明が難しい周作に対し、このことをどのように理解させた方がいいのか。「ガンバッタ」という言葉をほめ言葉としてだけではなく幅広い意味で使っています。周作が「ガンバリました！」と言うときは仕事終わりの意味でも使っています。作業が終わり一列に並んだ作品の終盤がクオリティが明らかに低い場合、本人に「ガンバッタのはどこまでですか？」と聞くと、自分でも自覚しているので「ここまでは」と示す箇所は正確です。「ガンバッテないのどうしますか？」と聞くと「ダメです」と答えるので、私がダメな作品をつぶし一旦家に帰します。泣きながらお母さんと工房に戻ってきてつぶした数だけ「もう一度作らせてください」と言い、制作して終わる。このようなことを繰り返して、クオリティを学習していったのだと思います。この方法が正しいか間違いかはわかりませんが、

親子の信頼関係があつてこそその教育方法もできません。仕事をするのは周作で、親は辞めたければいつでも辞めていいと本気で思っているの、彼は「自分の仕事を守るの自分分しかない」と自覚しているようです。

「健常者に近づける必要は無い」

中野：「問題行動」って社会が問題と言っているだけで、当事者は嬉々としてやっているんです。「寝食を忘れ没頭する」という、ものづくりをする者にとっては理想的な状態を彼らは自然に行っています。私の息子も言葉での表現は苦手でしたが、粘土を持たせると飽きずに作り続けていました。そんなに好きなことを仕事にできたらどれだけ幸せなのだろうと想像したのが陶芸工房を作るきっかけでした。才能を世の中に認められた芸術家、科学者の多くは、必ずしもバランスのとれた人間だけではないと思います。その偏りこそが才能の証だとすれば、才能を発揮できる環境を誰かが整えなければなりませんし、問題は社会の側にあるのかもしれない。

「幸せとは」

山出：以前中野さんがおっしゃっていた「周

作が産まれた時代が今ではなくて、装飾が施された鍔や土器を作ることが重要だった縄文時代なら、息子はヒーローだったかもしれない」という言葉がずっと僕の心に刺さっています。

中野：単に器としてだけだったら複雑な模様や装飾は必要ないでしょうけど、縄文土器があの形となったのには美意識があり、そこには自分たちの常識を超えた呪術的な要素も含まれると思うんです。想像もできない不思議な造形を物に込める特別な職業があつたのかもしれないね。

山出：価値観が違えば周作君が時代の中心にいたかもしれない。

中野：またはもつと外側にいたのかもしれない。たとえば戦争になれば徴兵検査で彼はたぶん落とされる。それが幸せなのか不幸なのかは、時代によって異なるでしょう。自分達のは意外と理解しづらいものですが、障がい者の幸せを考えることによって自ずと自分達の幸せについても考える。

障がい者が幸せに暮らせる環境が実現できれば、健常と言っている私達も幸せに暮らせるのではないのでしょうか。こんなことを考えたり話し合ったりする機会を与えてくれた周作に感謝しています。私にもう一度、別の人生があるとしたら、生まれてくる子は今と同じ周作がいいと思っています。

アートリンク・プロジェクト

田野智子 | たのともこ 清水直人 | しみず なおと

岡山県岡山市



清水直人(左) 田野智子(右)

「プロジェクトはどのように始まったか」

田野：アートリンクは障がいのある人とアーティストが1対1でペアを組み、共同制作を行うプロジェクトです。もとはフロリダのART NPO「クリエイティブ・クレイ」の活動をモデルにしています。

私自身は1994年から、障がいのある人の表現活動を行う施設に、絵画講師として通っていました。しかし、その活動を施設内だけでとどめておくのではなく、地域と繋がりたい

と思っていました。折しも、エイブルアートと出会い、頻繁にシンポジウムや各地のフォーラムに参加し続けて、NIAAD（全米障害者芸術機関）のエリアス・カツ博士のお話など興味深く聞きました。エイブルアートとの出会いで繋がったのが、当時NPO「クリエイティブ・クレイ」代表を務めていたグレイスでした。彼女が、アートリンクを岡山でもやっではどうかと背中を押してくれたんです。

岡山は若手アーティストの集まる場が多く、地域活動も活性化し始めていたので、場所を持たない私達も、地域の中でリンクすることができたんですね。そんなふうには、いろいろな人やタイミングが絡み合って土台ができました。

「双方のマッチング」

田野：市内のギャラリーや施設などに行き、取材したりチラシを配ったりしながら声をかけ、アーティストと障がいを持つ方をマッチングしていききました。清水さんはその中で、ギャラリー経由で繋がったアーティストです。

清水：僕はアートリンクに関わるまで、障がいへの理解も関心も特になく、企画展に参加できるのになっていくくらいの考えて、2005年にアートリンクに参加させていた

「活動の広がり」

できました。そのときに、田野さんの事務所で自閉症の中学生の長谷川海くんに出会いました。自閉症ってどういうことなのか、今でもよくわからない。それがたぶん僕に声がかかった理由だったんでしょね。

今でも障がいには特別な興味があるわけじゃないんです。社会通念的に、差別や偏見がなくなったらいいとは思いますが、でも、だからやっているというわけではない。障がいを持つ方との活動を「いいこと」と捉えられることもありますが、一つの社会なのに、いいとか悪いとかはないと思っています。

田野：高松市の市長が姉妹都市であるフロリダのセントピッターズバーグ市を視察したのですが、たまたまそこが「クリエイティブ・クレイ」の所在地でした。その見学をきっかけに、2010年の瀬戸内国際芸術祭に合わせてアートリンク展を開いてくれと依頼されました。その準備として2009年に始めたのが高松アートリンク。全く知らない土地だったので、岡山とは随分勝手が違っていました。清水さんは別の活動をしていただけで、経験のある人に手伝ってもらいたくて復活してもらいました。



「うさぎ天使」展示の様子（左：清水直人、右：上原舞）

清水…アーティストとしての参加に加えて、過去の経験を活かしアーティストの選定も一部担当しました。どんなベアなら力を発揮できるか、何年もかけて模索してきました。実際にやってみると、相手の表現の力が強すぎて自分が作る意義を失う作家さんもいました。普段と異なる表現を試行錯誤するうちに疲れてしまうこともあります。相手が障がいを持っているという視点ではなく、ちゃんと向き合える方がアートリンクには向いていると思います。

「参加アーティストに生じる変化」

清水…はじめて参加アーティストとして加わったときに衝撃を受けたのは、他者と一緒にも

のを作るということでした。一人で制作するときは自分の視点で社会を切り取りますが、そこに相手の視点も加わるので好き勝手に切り取れない。結果、相手の視点を大切にすぎで、自分がしたいことがわからなくなりました。でも、そこで決断して関係性を作品化するのがアーティストの力なんだと思います。

田野…そういう意味では、島やまちの中で地域の特性を活かした作品を作ると同じだと思います。まちにはいろんな人が住んでいて、いろんなエキスがある。アートリンクだっただけです。その関わりから自分の視点で決めていく力と、作品として終わらせる力がアーティストとして大事なのかな。

清水…アートリンクでの経験がきっかけになり、2008年から2009年まで、地域とアートを繋ぐ活動をしていました。濃密に他者と関わるということに衝撃を受け、ホワイトキューブの中だけではなく、いろんな人と関わることへの興味が湧いてきたんです。学生の頃は浅はかに社会的な作品を作ったりしていたんですが、自分が捉えている世界は、自分のアクセスできる環境や情報でしかなかった。アートリンクに参加する以前、僕は障がいに対してリアリティのある情報を持っていませんでした。それは知らないのと同じです。自由で物事を見ているつもりが、自分でも気づかないうちに狭い枠の中で社会と関わっていたんだと感じました。枠を広げることがいいこととは限りませんが、僕の性分としてはもっと広くしたい。それが地域と関わろうと思った理由です。

「「うさぎ天使」の制作」

清水…個人での制作では、満足のいく作品ってなかなかできないんです。でも他者と一緒に制作するときは、相手が完成だと言いつつ、自分もそれに納得する瞬間がある。それを始めて体験したのは、上原舞さんと「うさぎ天使」を作ったときです。上原さんが子どもの

頃からずっと描いているうさぎの絵をバールンにすることで、僕は彼女にとってのこの絵の大切さを表現したいと考えました。会場に置かれたバールンが届くと、彼女は「このしわくちゃなのが私の作品なの？」という様子で見えていました。空気を入れ始めると、自分の描いた絵がバールンになっていくことに気がついて、彼女は「がんばれ」と応援を始めたんです。僕にとっては作品を設置するための作業だったのに、それを見て彼女の気持ちは風船のようにどんどん膨らんでいった。この作品は、ガスとともに彼女の思いが込められて完成したんです。共同でものを作るときには、何気ない行為が相手にとって非常に重要な意味を持つこともある。そういうことが複雑に絡んでいるんだと思います。

「今後の展開」

清水…作品の評価は時代や包摂される社会によって変わってしまうものだから、自分の間いや関心が洗練された形で表現できたと自分が実感できたときの方が幸福度が高いんです。自分と物事に対してこれからの誠実に向き合い続けたいと思っています。

やまなみ工房

山下完和 | やました まさと

滋賀県甲賀市



「設立の経緯」

山下…やまなみ工房は、1986年に3名の利用者とその家族と一緒に、無認可の共同作業所としてスタートしました。僕が関わり始めたのは2年目くらいから。当時、僕はパーテンをしていたのですが、ある日、知人に忘れ物を届けてほしいと頼まれた先がやまなみ工房だったんです。障がいのある人達が明るく僕を歓迎してくれて、こんなに喜ばれるのって始めてだったので、モチるって錯覚をしてしまっ。僕自身が「この人達と毎日過ごしたい」と思って、居座ったのがきっかけです。就職したのはそれから半年後でした。でも、はじめは彼らを社会に適応させなくてはいけないと一方的に思っ、一人ひとりの本音と向き合えていませでした。

2年くらいしたときでしたかね。重度の自閉症の方が内職する手を止め、楽しそうに絵を描いていました。僕は彼のあんな笑顔を見たのははじめてでした。そして思っ。彼は今、自分の人生を楽しんでいるのだろうか。やまなみ工房での仕事は、彼にとっ何なんだろう。内職以外にも、たとえ対価に結びつかなくても彼には彼の生き方があるのではないか。そう考、彼が他律的な環境から開放され、自律的に自分自身を表現することが

できる時間と空間を作りたいと思っ。です。

「表現活動を始めた末の変化」

山下…表現活動を始めたとき、粘土や絵ではなく字や手仕事を覚えさせて就労に向けてほしいと一部のご家族から反対を受けました。でも、明らかに彼らの顔つきが変わっ。すよね。言われるがままではなく、好奇心と想像力が見られるようになり、笑顔が増えパニックや泣くことが減っ。さらに彼らの行動や作品をいっしか多くの方が評価するようになり、ご家族も誇りを感じ「この子はこの子でいい」と思えるように変化していきま。

「スタッフのスタンス」

山下…楽しいことを彼らに紹介することも僕達の役割の一つなんです。海に連れて行っり、信楽焼の工房に立ち寄っ粘土を触っ。みたり、そういう日常生活がいつの間にかそれぞれの表現に繋がっ。ただけなんです。施設にアートを取り入れるとかアート化することではなく、ただ一度しかない人生を様々な経験をする中で心豊かに過っ。たい。

彼らにとっの障がい、そして制限や制約が福祉施設の中にある僕達職員になってはい



けないと思うんです。たとえば施設内にいる関係者が知らず知らずのうちに障がいの困難さやネガティブな話ばかりを伝えたり、近づけないように閉鎖的になったり、そのことが偏見や差別を作り出してしまっただけではないか。彼らに目的があるなら、それに対して僕はできる限りのことをしたいと思います。いつでも自分のしたいことに取り組めるし、取り組まなくてもいい。そういう判断が可能なお環境にいるからこそ、本当の意味での自立に繋がっているんじゃないかな。それを僕らが、工夫して社会に繋げていく。たとえば彼が落書きのように描いた絵をジャケットにしていたら、それが世界中の素敵なショップで販売され多くの方の手に渡りました。彼はジャケットのデザインをするために絵を描いたわけでも描かされたわけでもないから、無理をしていない。でも彼は素晴らしいアーティストの一人として、障がいや福祉というフィルターを



通さずに、一人の作家として彼の作品が社会の中で評価されているのです。内職しているときはうまくできずに、否定ばかりされていたのが、今は誰の介入もないし、納期もなければ失敗もない。全てが一人ひとりにとって成功なんです。みんなニコニコ過ごしています。

「いかに個の輝きを放てるか」

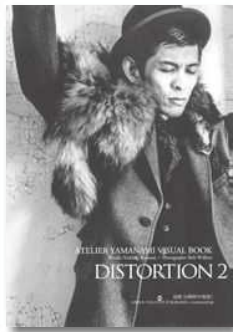
山下…18年間、寝るとき以外ずっとインスタントラーメンの袋を手を持っている女性がいるんですが、それは彼女にとって唯一の表現であり、最も至福な行為なんです。僕らにそれを取り上げる権利はないですよ。ラーメンは彼女にとって、生きるための大事なアイテム。18年でそのラーメンの数は75000個を超えました。

一番大事なのは、彼らがハッピーになること。日課や作業という僕達が一方的に決めたシステムの中で支援者の理想に近づけるのではなく、彼らの希望に向うこと。大切なのは目の前の彼らが笑顔で満たされ個の輝きを放つことだと思います。ご家族の願いも大事です。関係者の概念もさまざまです。でも僕はただ彼らの思いや目的に対し真摯に向き合うだけ。いたってシンプルなんですよね。

山出…その目的というのは、彼らにとって、自



分らしさや幸せということですよ。山下…表現とはそもそも自分の世界を築くこと。彼らには一途で強い目的がある。僕らが偏った概念に照らして彼らと向き合い、多様で個性的な彼らの素晴らしい部分を変えようとしてしまっているようではだめですよ。山出…彼らをもっと幸せになるため、新たな取り組みや考えはありますか？



DISTORTION2
 ©PR-y
 Words: Yoshiaki Kasatani
 Photo: Rob Walbers

注1) PR-y

知的障がい者施設などで生み出された作品に出会い魅せられ、PR-y(プライ)というプロジェクト・チームを設立。

PR-yとはPR(広報活動)とpry(こじ開ける)という言葉を合わせた造語。

山下…やはり彼らの人格がしっかり大地に根を張ること、そして彼らが彼らしく過ごせる社会になることでしょうか。僕は単純に、彼らが一人の素晴らしい人格者でありアーティストとして魅力的だから一緒にいさせてほしいと思っています。

最近、やまなみ工房に通う人達の写真集をPR-y(*注1)の皆様にプロデュースいただき出版してもらいました。一流のヘアメイクとスタイリストをお招きし、世界的に活躍されるベルギー人のカメラマンに撮影をしていただきました。みんなプロのモデルさんみたいでしょ? そうしたら、それこそ見たことのない笑顔で喜んで。彼らはおしゃれに無縁

な人でも興味がない人でもないんですよ。おしゃれにすることが困難な環境で過ごしているだけなんです。これは障がい者の写真集です」とか、誇張して謳わなくてもいいんです。余計なフィルターは要らない。なぜなら彼らは、とてもユニークでかっこいい人なんです。それを僕達が、もっともっと、いろんな方法で自慢したいですね。

「環境を整える」

山下…10年間、ほぼ毎日のようにパニックを起こしていた男性がいました。どうしたら穏やかに過ごせるだろうと試行錯誤の末に、一人っきりの部屋で、大音量でお気に入りの唄を聴きながら寝転んで絵を描くと、落ち着いてパニックが起こらなくなり快適に過ごせるようになったんです。僕は10年間も、彼ルールとスタイルに気づけなかったんです。僕らのすべきことは彼らが穏やかに過ごせるよう、一人ひとりの価値観に応じた物的環境と、人的環境を整えることです。

山下…100人いれば100通り、違うんですね。

山下…障がい者とか利用者とか、一括りにしてしまうと彼らの個の思いが見えなくなってしまう。彼らの内からなる真の思いが真っ直





ぐ伝わり輝きを放てるかという工夫を大事にしたいと思いました。一つの部屋で、与えられたことを5年先も10年先も毎日しているような人生にしたくはない。これからもこんなことしたら、あんな場所に行ったら、こんなものが目の前にあったらみんな喜ぶかな、驚かなくて。毎日ワクワクするようなことをしたいです。

山出…楽しみ方を教えるんじゃないで、楽しむための何かが転がっているっていう感じですね。

山下…自分らしく生きること、楽しく生きること、人として大切なことを教わっているのは僕達の方です。これからも彼らが彼らであるためにそれぞれの苦痛を最大限取り除きハッピーを感じる毎日になればと思います。みんなが健康で笑顔でいると周りも心が穏やかになる。やまなみ工房の人達が、誇りを持って楽しく素敵に活動していることを伝えたいですね。

「これから目指す未来」

山出…これからどういう未来を目指しますか？
山下…僕自身には何の力もないし、社会を変えるみたいな大層なことは思っていません。僕らの目指すことは一つです。

彼らが喜びに満たされて、笑顔になること。



彼は自ら幸せだと言葉で伝えてはくれませんが、でも、僕は彼らの表現や、そして彼ら自身の「特別な思い」を大事にできる人でありたいと思っています。同時に僕が尊敬する彼らのことを一人でもたくさんの人に知ってもらいたい。具体的には言えませんが、そのことにより社会が必ずいい方向に変わる気がします。彼らにはその力と魅力が誰よりもありますから。